

元稹の夢についての考察

高橋美千子

京都大學

元稹（七七九—八三二）字は微之。白居易の無二の親友として知られ、「元白」と屢々並稱される中唐の詩人である。

白居易の弟、白行簡の『三夢記』には、二人の登場する夢の話がある。白居易等の都での行動を元稹がまさにその日に、旅先の梁州で夢にみていたという話である。そこには、白居易に寄せた「紀夢」という詩を載せている。

夢君兄弟曲江頭 夢む 君が兄弟 曲江の頭

也入慈恩院裏遊 也た慈恩院裏に入りて遊ぶを

屬吏喚人排馬去 屬吏 人を喚び馬を排し去らしむ

覺來身在古梁州 覺來 身は古梁州に在り

この詩により、夢の内容と實際の行爲が一致したことが判明したのであるが、この詩のように夢を扱い、語る詩が、元稹には多い。⁽²⁾ 本稿では、夢が元稹の生きた時期にどのよ

元稹の夢についての考察（高橋）

うにとらえられ、元稹がその夢を詩の中でどのように使用しているかを考えたい。まず、はじめに、古代の中國では、夢はいかに受けとめられていたかについて考えよう。

I

一般に、原始の人々にとって、夢は死と同様、不可知性のものとして神祕性が強く、また、夢と覺醒とは區別されず、夢にみたものに實際と同じ程度に現實性を與えている。中國では、どうであろうか。

『春秋左氏傳』には、夢に關する記述が多い。宣公三年の條には、次のような記事がある。

冬、鄭の穆公卒す。初め鄭の文公、賤妾有り。燕媧と曰う。夢に天使已に蘭を與えて曰く、余は伯儵と爲す。

余は而の祖なり。是を以て而の子と爲さん。蘭に國香有るを以て、人之を服媚することは是の如くならんと。既にして文公之を見る。之に蘭を與えて之を御せんとす。辭して曰く、妾不才なり。幸いにして子有りと、將に信ぜられざらんとす。敢て蘭を徵とせんか。公曰く、諾と。

穆公を生む。之を名づけて蘭と曰う。

夢が未來を豫言し、また天の使いの蘭を與える行動が、現實の文公の行動と一致する。夢は、未來の事象を知らせるものとして、或いは、神聖な存在との出會いの場として考えられている。このように、夢のお告げとして説明される場合もあるが、成公十年の條では、夢の内容は暗示的であり、夢の解釋をする者が登場する。

晉侯、夢に大厲髪を被りて地に及び、膺を搏ちて踊りて曰く、余が孫を殺すこと不義なり。余、帝に請うことを得たりと。大門と寢門とを壞りて入る。公懼れて室に入る。又、戸を壞る。公覺めて、桑田の巫を召す。巫の言うこと夢の如し。公曰く、何如せん。曰く、新を食せずと。……

六月丙午、晉侯麥を欲す。甸人をして麥を獻せしむ。饋人之を爲す。桑田の巫を召し示して之を殺す。將に食せんとす。張して厠に如く。陥りて卒す。

夢は豫兆であり、何か特別の意味があるとされる。が、この記事の夢は奇怪で、何を表わすのか判然としない。そこ

で夢の解釋者を召してその意味を問うている。夢占いの専門家が、未來を予測したり、夢の解釋をしたことがわかる。が、『周禮』春官占夢では、官職としてあげている。

占夢は、其の歳時を掌り、天地の會を觀、陰陽の氣を辨じ、日月星辰を以て六夢の吉凶を占う。

夢を占う役人がいたということは、夢が私的レベルだけでなく、公的レベルでも扱われていたことを意味しよう。逆に言えば、夢は解説可能なある意味を隠し持ち、適當な解説者なら、その意味を明確にすることができるとは、必ずだと考えられていたのである。だから、夢が現實と一致すると夢を信賴するため、その解説は重要視され、桑田の巫は、占いがはずれたとして、殺されるといふ事も起こるのである。このように、夢は啓示であり、豫兆と考えられた。

一方、夢と魂とを結びつけるのも原始の人々特有のものである。中國では、「夢魂」「魂夢」と表現されていた。

『莊子』齊物論篇には、

大知は閑閑たり、小知は問問たり。大言は炎炎たり。

小言は詹詹たり。其の寐ぬるや魂交わり、其の覺むるや

形開き、與に接して構を爲し、日に心を以て闘う。

とある。『莊子』においては、夢は心の亂れに成立すると考えられていて、眠っている時でも魂が交わるとは、心が休まらずに夢を見るということである。後にも、魂交は夢を見ることを指す。

魂交観容色 魂交わりて 容色を覩る

(沈約「夢見美人」)

魂交忽在御 魂交わりて 忽ち御に在り

(劉孝綽「古意」)

このように、夢とは睡眠中の魂の運動であると理解することにより、夢が何に妨げられることもなく、空間、時間を超えてしまうのは、魂が肉體から抜け出して自由にさまざまうからだと説明できる。しかし、そこには、夢を見る者が夢を作り出すという意識はなく、何者かから與えられるものとみなされている。

II

元稹には、夢を豫兆として考え、夢と現實が一致すると

元稹の夢についての考察(高橋)

いう、夢を信頼する態度はない。前掲の『三夢記』には、

豈に偶然なるか。抑も亦た必ず前定なるか。予知るあ
たわず。

という述懐があり、白行簡も夢を豫兆として考えることに疑問を感じて、全面的に信頼を置くことはできずにいる。

また、段成式の『酉陽雜俎』前集卷八夢には、

藏氣陰多ければ數々夢む。陽壯んなれば夢少なく、夢
みるも亦た復た記せず。

と、陰陽の思想で、夢を解釋しようとし、

それ替者に夢無し、則ち夢は習なるを知る。

と經驗的に得るものと理解し、

成式の表兄、盧有則、夢に擊鼓を見る。覺むるに及び、
小弟の戯れに門を叩きて街鼓と爲せるなり。

と、現實と夢が交錯することを挙げている。このように、
中唐以後においては、夢に對して、神秘的な感覺でのみ把握
えることから脱して、分析する姿勢がある。夢は經驗によ
り得られる一つの現象とまで考えられて、その分、夢に重
みが失なわれてゆく。こういう時代に、元稹はどのような

夢の語を用いているのか検討してみよう。

元稹の一つの特徴として、どのような夢をみたかの敘述が多い。そして、その内容は悲哀に満ちている。

夢成之

燭暗船風驚獨夢 燭暗く 船風獨夢を驚かす

夢君頻問向南行 君が頻りに南に向って行くを問うを夢

む

覺來不語到明坐 覺來 語らず明に到るまで坐す

一夜洞庭湖水聲 一夜 洞庭 湖水の聲

この詩は、『元氏長慶集』卷九傷悼詩に收められており、成之は、最初の妻、韋叢である。⁽⁵⁾ 韋叢は、元稹が監察御史に在職中、東川から洛陽に戻ってきた時、長安で亡くなった。亡妻が、南に位置する江陵に貶流されている元稹に、南への旅を頻りに問うのは、元稹を、夢みる前より一層やりきれない感情に浸らせている。そこには、妻に會えた喜びはなく、夢は決して甘く楽しいものではない。

遺病其十

朝結故鄉念 朝に結ぶ 故郷の念い

暮作空堂寢 暮に作す 空堂の寢

夢別淚亦流 別れを夢み 淚亦た流れ

啼痕暗橫枕 啼痕 橫枕に暗し

昔愁憑酒遣 昔 愁 酒に憑りて遣り

今病安能飲 今 病 安ぞ能く飲まん

落盡秋槿花 落ち盡くしぬ 秋槿花

離人病猶甚 離人 病猶お甚し

夢での別れの相手は故郷の人であろうか。誰であれ、夢で會うのではなく、別れを夢に見るのである。孤獨で實際に離別している状況でありながら、夢でもさらに別れる。その悲しみは二重である。まして今は、愁いを忘れようと飲む酒も病がゆえに飲めずにいる。いかんともし難い感情が元稹を包んでいる。

この二つの詩でみるように、元稹の夢は、悲哀を喚起し、現實の悲觀すべき條件を打破するためのものではない。夢の中で悲しみを感じ、そのために、覺醒後、一層感情は鮮明になる結果となる。夢をみることは救いにはならないのである。

元稹の詩には、「夢成之」のように、夢によって、現實に會えない人と會うという内容が多い。人を夢にみて、それを詩にする場合の共通條件は、對象が死去しているとか、遠隔地にいるとか、會うことをいくら切望しても不可能であるということである。そういう條件の下で、會うための手段として夢が把えられている。そして、次のように、實際の通信手段の手紙と對比されている。

山水萬重書斷絕 山水萬重 書斷絶し

念君憐我夢相聞 君が我を憐れんで夢に相聞するを念う

〔酬樂天頻夢微之〕

音微千里斷 音微 千里斷え

魂夢兩情偏 魂夢 兩情 偏えなり

〔酬竇校書二十韻〕

故交音訊少 故交 音訊少く

歸夢往來頻 歸夢 往來頻りなり

〔酬樂天早春閑遊西湖頗多野趣恨不得與微之同賞因思在

越官重事殷鏡湖之游或恐未暇因成十八韻見寄樂天前篇到

時適會予亦宴鏡湖南亭因述目前所睹以成酬答末章亦示暇

元稹の夢についての考察（高橋）

誠則勢使之然亦欲粗爲恬養之贈耳）

しかし、現實の交際手段と夢という手段を對比させる時、相手に自分の感情を傳達したいとか、どうしても會いたいが會えない、だからせめて夢の中で、というような積極的な態度や夢に願いをかけるような切實な態度は、稀薄と思われる。

また、誰々を夢に見たと敘述する場合、その人物を思慕しているからだという點が常に前提としてある。夢は相手を思っているから通信手段になると考える。前掲の「酬樂天頻夢微之」について検討してみる。始めに、白居易が元稹に送った詩を上げる。

夢微之

晨起臨風一惆悵 晨に起き風に臨んで一たび惆悵す

通州湓水斷相聞 通州 湓水 相聞を斷つ

不知憶我因何事 知らず 我を憶う何事にか因る

昨夜三更夢見君 昨夜 三更 夢に君を見る

白居易は、元稹が自分を憶っているから、夢に彼が現れたという。元稹は通州、白居易は江州と、遠隔地において、互

いに安否を問うことも途絶えている。惆悵するに十分な状況である。そのうえ、何に因つて元稹が自分を憶っているのかしらと、元稹の身を案じている。繊細な白居易の心使いが表現されている。これに對して、元稹の詩は、

山水萬重書斷絕 山水萬重 書斷絶し

念君憐我夢相聞 君の我を憐れんで夢に相聞するを念う

我今因病魂顛倒 我 今病に因りて 魂顛倒し

唯夢閑人不夢君 唯だ閑人を夢み君を夢みず

と唱う。手紙と對比させて、意志の疎通の手段として、夢をとらえ、白居易と同様、互いに相手に心を寄せると、夢で相聞するということを意識している。『周禮』春官占夢の頃では、夢を、正夢、噩夢、思夢、寤夢、喜夢、懼夢の六種に分類しているが、今述べている夢は、思夢―覺めし時に之を思念して夢みる所、に相當する。⁶⁾白居易は、またこれを、

晚來夢見君 晚來 夢に君を見る

應是君相憶 應に是れ 君相憶うなるべし

〔初與元九別後忽夢見之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然感

懷因以此寄〕

と言及している。しかし、元稹の場合、先にあげた例以外では、わざわざ説明されることはない。そのことは、いわば夢を意識する場合の前提となつているのである。「鄂州寓嚴澗宅」では、自注に「澗不在」とあり、

心想夜閑惟足夢 心に夜の閑にして 惟だ夢足きを想い

眼看春盡不相逢 眼に看る春の盡くるまで相逢わざるを

という。この夢の内容は明らかでないが、恐らく會えなかつた嚴澗を夢みていると考えられる。會えなかつたという事實に、會える手段としての夢を導入し、殘念な気持ちを表現している。夢にみるのが、相手との親密さの證として、氣輕に使用されている。

ここで、杜甫の「夢李白」其の一と比較してみる。

死別已吞聲 死別 已に聲を吞む

生別常惻惻 生別 常に惻惻

江南瘴癘地 江南 瘴癘の地

逐客無消息 逐客 消息無し

故人入我夢 故人 我が夢に入り

明我長相憶 我が長相憶を明らかにす

恐非平生魂 恐らくは平生の魂に非ず

路遠不可測 路遠くして測るべからず

魂來楓林青 魂の來たるや楓林青く

魂返關塞黑 魂の返るや關塞黒し

君今在羅網 君は今 羅網に在り

何以有羽翼 何を以て羽翼有るや

落月滿屋梁 落月 屋梁に滿ち

猶疑照顏色 猶お顏色を照らすかと疑う

水深波浪闊 水深くして 波浪闊し

無使蛟龍得 蛟龍を使得しむる無かれ

この詩で、杜甫は、「追放された舊友からの便りはないが、夢に姿を現わした。これは、いつまでも友を思っていることを證明するものである。」と言う。其二では、「三夜頻りに君を夢む 情親君が意を見る」といい、夢を何故見るのか、因果關係を説明した上で、感慨を述べている。思夢の認識は、白居易、元稹と共通するが、杜甫は、この詩に於ては、夢に何か悪い兆しを感じとっている。「李白の幻は、

元稹の夢についての考察（高橋）

日頃の彼ではないようだ。離れているので、その理由は測ることができない。」といい、第九、十句は不吉な雰囲気醸し出している。夢に見たこと自體は、友を思うことによるのだが、杜甫にとって、夢は異常事態を想起する發端であり、自分では直接に感知できないが、何かしら凶兆なのである。

元稹の場合、前掲の『春秋左氏傳』の宣公三年の記事を典故とする詩はあるが、夢を未來や未知の世界の兆しとして考えることはない。いとも簡単に夢を導入して常に日常のレベルでとらえられる。

春明門外誰相待 春明門外 誰か相い待たん

不夢閑人夢酒卮 閑人を夢みず 酒卮を夢む

〔西歸絕句〕其四

別後料添新夢寐 別れし後 料おもうに新らたなる夢寐を添

うと

虎驚虵伏是通州 虎驚かし虵伏す 是れ通州なり

〔別李十一五絕〕其四

と、ここでも思えば夢に見るということは前提にあるが、

思いを凝結させた結果として夢を考えていない。實際に夢を見、それを述べるという態度である。だから、「酬樂天頻夢微之」では、白居易を夢に見ないと卒直に述べているのである。

また、「^レを夢む」「^レの夢」と題で内容を既定してしまっても、例えば、李賀の「夢天」の如く、詩全體が夢の敘述であることはない。李賀の詩では、

老兔寒蟾泣天色 老兔 寒蟾 天色に泣く

雲樓半開壁斜白 雲樓 半ば開き 壁斜めに白し

玉輪軋露濕團光 玉輪 露を軋ひいて 濕團光る

鸞珮相逢桂香陌 鸞珮 相い逢う 桂香の陌

黃塵清水三山下 黃塵 清水 三山の下

更變千年如走馬 更あらたまり變あわること 千年 走馬の如し

遙望齊州九點煙 遙かに望めば 齊州 九點の煙

一泓海水杯中瀉 一泓の海水 杯中に瀉ぐ

と、詩には夢の語は使用されず、天上の有様を幻想的に描いている。この詩題の夢は、夢という場を借りて、空想の世界を述べるためのものであり、頭の中で組み立てられた

ことを提示しているのである。それに對し、元稹の場合、夢から覺めたのちの感情に中心があり、夢といって空想詩を創作するのではなく、實際の體驗として夢を述べるのである。だから、元稹が夢を語る時、特に長篇の詩に至っては、常に彼の目は現實に向けられ、奇をてらう要素はそこには見受けられない。過大な期待をかけず、夢に不信を抱くこともなく、時の経過とともに夢が語られる。つまり、根本的に何故こんな夢を見たのかという疑問はなく、夢を素直に受けとめ、現實へと目を移していくのである。

III

次に夢を語る長篇の詩についてみてみる。

江陵三夢其一

平生每相夢 平生 毎つねに相い夢むも

不省兩相知 省かつて兩もに相い知らず

况乃幽明隔 况や乃ち 幽明隔へだたり

夢魂徒爾爲 夢魂 徒爾いたずら爲るをや

情知夢無益 情まことに夢の益無きを知るも

非夢見何期 夢に非れば 見ゆること何ぞ期せん

今夕亦何夕 今夕 亦た何の夕ぞ

夢君相見時 君と相い見る時を夢む

依稀舊粧服 依稀たり 舊き粧服

暗淡昔容儀 暗淡たり 昔の容儀

不道間生死 道わず 生と死を問つと

但言將別離 但だ言う 將に別離せんとすと

分張碎針線 碎かなる針線を分張し

襦疊故幷幃 故き幷幃を襦疊む

撫稚再三囑 稚きを撫して 再三囑し

淚珠千萬垂 淚珠 千萬垂る

囑云唯此女 囑して云う 唯だ此の女

自歎總無兒 自ら歎ず 總べて兒無きを

尙念嬌且駭 尙お念う 嬌にして且つ駭

未禁寒與飢 未だ寒と飢に禁えず

君復不憐事 君 復た 事を憐はず

奉身猶脫遺 身を奉ずることすら猶お脱遺す

况有官縛束 况や 官の縛束有り

安能長顧私 安ぞ能く長く私を顧んや

他人人間別 他人 生きながら間別す

婢僕多謾欺 婢僕 多く謾欺す

君在或有託 君在らば 或いは託する有り

出門當付誰 門を出づれば 當に誰に付すべき

言罷泣幽噎 言罷みて 泣くこと幽噎

我亦涕淋漓 我 亦た 涕淋漓たり

驚悲忽然寤 驚悲して 忽然寤め

坐臥若狂癡 坐臥 狂癡なるが若し

月影半牀黑 月影 半牀 黒く

蟲聲幽草移 蟲聲 幽草に移る

心魂生次第 心魂 次第を生じ

覺夢久自疑 覺夢 久しく自ら疑う

寂默深想像 寂默 深く想像すれば

淚下如流漸 涙下ること 流漸の如し

百年永已訣 百年 永く已に訣る

一夢何大悲 一夢 何ぞ太だ悲しき

悲君所嬌女 悲しむは 君が嬌しみし女

棄置不我隨 棄置 我に隨がわざるを

長安遠於日 長安 日よりも遠く

山川雲間之 山川 雲 之を間つ

縱我生羽翼 縱え 我 羽翼を生ずるも

網羅生繫維 網羅 生きながら 繫維す

今宵淚零落 今宵 淚 零落

半爲生別滋 半ば生別の爲に滋し

感君下泉魄 君が下泉の魄に感じ

動我臨川思 我が臨川の思を動かす

一水不可越 一水 越ゆべからず

黃泉況無涯 黃泉 況や涯無きをや

此懷何由極 此の懷い 何に由りてか極めん

此夢何由追 此の夢 何に由りてか追わん

坐見天欲曙 坐して見る 天曙けん欲するを

江風吟樹枝 江風 樹枝に吟ず

この詩は悼亡詩であり、妻を失った悲しみと遺された子供と自分の不安を唱っている。夢は何の足しにもならない。夢でしか會えない亡妻との夢の場面は別離である。そこで

は、妻は昔のままの姿で現われ、遺した子へのやさしい心遣いを見せる。しかし、夢は悲哀の世界であり、その中心とも言える遺児の保子は、現實においてさらに悲哀の對象となる。夢での妻の一言一句が、覺めた後の元稹の胸に響く。

この詩は、夢の性質をある程度規定し、その中で夢の世界を作り上げ、夢から覺めた世界—現實と對應させるという巧みな構成である。つまり、現實を深く洞察するための夢の世界であり、夢との比較によって、現實がより鮮明に浮かび上がっていくのである。それに加えて、夢の世界自體は、突飛なものではなく、現實を基盤とした世界である。夢の世界では、魂は自由に行動することが可能であり、時、場所、登場人物と話の要素に制限がない。しかし、この詩では、そのことを踏まえながら、亡妻との別離という場面設定により、死者との會話を可能にしてはいるが、現實から遊離するものではない。こうありたい、こうあればよいのにとという理想や希望の世界を夢で構築するものではない。反對に、實際の自己の悲惨な狀況を反映している。だから、

夢の中でも悲しみ泣き、夢から覺めると、夢と現實とを比較し、さらに悲愴感さえ帯びてくる。それは平素から意識のうち存在し、または、不安に思い續けていた事柄が夢を引き起こし、それによって一層自分の意識に氣づき、改めて確認しているのではないかと思われる。

次に、この詩と同様、亡妻を悼む「夢井」を検討してみる。

夢上高原 夢に上る 高高の原

原上有深井 原上 深井有り

登高意枯渴 高きに登りて 枯渴を思おもひ

願見深泉冷 深泉の冷きを見んことを願ねがう

徘徊遶井願 徘徊 井を遶りて願ねがみ

自照泉中影 自ら照す 泉中の影

沈浮落井瓶 沈浮す 井に落つる瓶

井上無懸綆 井の上に 懸けん綆じょう無し

念此瓶欲沈 此の瓶の沈まんと欲するを念ねんいて

荒忙爲求請 荒忙 爲に求請す

遍入原上村 遍く原上の村に入る

元續の夢についての考察（高橋）

村空犬仍猛 村空しくして 犬仍お猛し

還來遶井哭 還り來りて 井を遶りて哭す

哭聲通復哽 哭聲 通じて復た哽せせぶ

哽噎夢忽驚 哽こう噎えつ 夢 忽ち驚おどめ

覺來房舍靜 覺め來れば 房舍靜かなり

燈焰碧隴隴 燈焰 碧くして 隴隴

淚光凝罔罔 淚光 凝りて 罔罔けいけい

鐘聲夜方半 鐘聲 夜 方まさに半なかば

坐臥心難整 坐臥 心 整ととのい難し

忽憶咸陽原 忽ち憶おもう 咸陽の原

荒田萬餘頃 荒田 萬餘頃

土厚墳亦深 土厚くして 墳亦た深く

埋魂在深塹 魂を埋めて 深塹ふちに在り

塹深安可越 塹深ければ 安ぞ越ゆべき

魂通有時逞 魂通すること時に逞たくましきまにす有り

今宵泉下人 今宵 泉下の人

化作瓶相警 化して瓶と作りて相あひま警いましむ

感此涕汎瀾 此に感して 涕汎瀾

汎瀾涕霑領 汎瀾 涕 領えりうるおを霑す

所傷覺夢間 傷む所は 覺夢の間

便覺死生境 便ち覺ゆ 死生の境

豈無同穴期 豈に同穴の期無からんや

生期諒綿永 生期 諒まことに綿永たり

人恐前後魂 人は恐る 前後の魂

安能兩知省 安ぞ能く兩ともに知省せんや

尋環意無極 尋環 意 極まる無く

坐見天將晒 坐して見る 天の將に晒あびんとするを

吟此夢井詩 此の夢井の詩を吟ず

春朝好光景 春朝の好光景に

「江陵三夢」其一と同様、夢と覺醒時をはつきりさせ、夢の部分をつきぼりにしている。また覺醒後、自分なりに夢を解釋している。それは同時に、自分の感情の整理である。ここで描かれる夢は、古くからの比喻を用いての幻想的なものである。この詩では、夢の魂が自由に遊行する點を指摘している。夢自體には、妻は登場しないが、元稹は、妻の魂が瓶となつてあらわれたと解釋している。井戸に瓶が

落ちるといふのは、古くから男女の離別のひきあいに用いられ、白居易の「井底引銀瓶」でも

井底引銀瓶 井底 銀瓶を引く

銀瓶欲上絲繩絕 銀瓶上がらんと欲して絲繩絶つ

石上磨玉簪 石上 玉簪を磨く

玉簪欲成中央折 玉簪成らんと欲して中央より折る

瓶沈簪折知奈何 瓶沈み簪折る知らず奈何せん

似妾今朝與君別 妾が今朝君と別るるに似たり

と喩えられている。

この夢は悲慘である。瓶は井戸に落ち、引き上げること也不可能である。絶望感さえ漂うが、これに必死に抵抗を試みる。が、結局、爲す術なく、涙にくれるしかない。

悲哀の頂に達して夢から覺める。しかし、元稹にとつては、覺醒時の方がより傷ましい。夢の因果關係を明確にするところが、現實を一層深く見つめさせ、生と死という問題にまで思いをめぐらせてしまうからである。瓶が妻の化身であり、自分をいましてしまうと感じ、夢によって、人生の不安に對する自分の意識が表面化するのである。夢は自らの

感情を吐露する契機である。

この二首は、悼亡詩であるが、悼亡詩に意識的に夢を導入したのは、韋應物と言われる。(9)

夢想忽如睹 夢想 忽ち睹るが如く
驚起復徘徊 驚起して復た徘徊す

(傷逝)

歲月轉蕪漫 歲月 轉た蕪漫し

形影長寂寥 形影 長に寂寥たり

髣髴覩微夢 髣髴 微夢に覩い

感歎起中宵 感歎して中宵に起つ

綿思羈流月 綿思 流月に羈たり

驚魂颯迴颿 驚魂 迴颿に颯たり

誰念茲夕永 誰か茲の夕の永きを念わん

坐令顏鬢凋 坐せそに顏鬢をして凋ましむ

(感夢)

兩詩とも、夢にみた対象は、亡妻であることが明白である。

ここでは、夢は不安な感情を浮き上がらせている。しかし、その内容について具體的に述べることほしない。これに比

元稹の夢についての考察(高橋)

して、元稹は、夢を純粋な感情を抽出する手段として考え、夢を仔細に再現することによって、新たに悲哀の世界を構成したといえる。

次にあげる「感夢」は妻でなく、生前世話になった裴垵を対象としたものであるが、これも故人に對しての感情を、同様に夢を通じて表現している。

十月初二日 十月初二日

我行蓬州西 我 蓬州の西に行く

三十里有館 三十里 館有り

有館名芳溪 館有りて 名は芳溪

荒郵屋舍壞 荒郵 屋舍壞れ

新雨田地泥 新雨 田地泥る

我病百日餘 我が病むこと 百日餘

肌體願若刳 肌體 願うに刳かるるが若し

氣填暮不食 氣填よまぎ 暮に食さず

早早掩寶圭 早早 寶圭を掩う

陰寒筋骨病 陰寒 筋骨病み

夜久燈火低 夜久しく 燈火低る

忽然寢成夢 忽然 寢ては夢を成す

宛見顔如珪 宛も顔の珪の如きを見る

似歎久離別 久しき離別を歎くに似たり

嗟嗟復悽悽 嗟嗟 復た 悽悽

問我何病痛 我に問う 「何れの病痛なるか」と

又歎何栖栖 又た歎ず 「何ぞ栖栖たる」と

答云痰滯久 答えて云う 「痰滯ること久し

與世復相睽 世と復た相い睽く」と

重云痰小疾 重ねて云う 「痰は小疾なり

良藥固易擠 良藥 固に擠し易し

前時奉橘丸 前時 橘丸を奉じ

攻疾有神功 疾を攻むるに神功有り

何不善和療 何ぞ善く和療せざる

豈獨頭有風 豈に獨だ頭に風有るのみならん」と

殷勤平生事 殷勤 平生の事

款曲無不終 款曲 終めざるは無し

悲歡兩相極 悲歡 兩つながら相い極まり

以是半日中 是を以て 日中に半す

言罷相與行 言い罷みて相い與に行く

行行古城裏 行き行きて古城の裏

同行復一人 同行 復た一人

不識誰氏子 識らず 誰氏の子

遂巡急吏來 遂巡 急吏來たり

喚呼籲且止 喚呼して且く止まるを願う

馳至相君前 馳せ至る相君の前

再拜復再起 再拜し復た再起す

啓云吏有奉 啓して云う 「吏に奉有り

奉命傳所旨 命を奉じて 旨とする所を傳う

事有大驚忙 事に大いに驚忙する有り

非君不能理 君に非ずんば理むることあたわず」と

答云久就閑 答えて云う 「久しく閑に就く

不願見勞使 勞使せらるることを願わず

多謝致勤勤 多謝す 勤勤たるを致すを

未敢相唯唯 未だ敢て相い唯唯たらず」と

我因前獻言 我因りて前んで獻言す

此事愚可料 「此事 愚 料るべし

亂熱由靜消 亂熱 靜に由りて消え
 理繁在知要 繁を理むるは 要を知るに在り
 君如冬月陽 君は冬の月の陽の如し
 奔走不必召 奔走するも必ずしも召されず
 君如銅鏡明 君は銅鏡の明るきが如し
 萬物自可照 萬物 自ずから照らすべし
 願君許蒼生 願わくは 君 蒼生に許し
 勿復高體調 復た體調を高くする勿かれ」と
 相君不我言 相君 我に言わず
 顧我再三笑 我を顧みて再三笑う
 行行及城戸 行き行きて城戸に及び
 黯黯餘日輝 黯黯として 日の輝きを餘す
 相君不我言 相君 我に言わず
 命我從此歸 我に此より歸ることを命ず
 不省別時語 別時の語 省つまひらかならず
 但省涕淋瀝 但だ 涕淋瀝たる 省かなり
 覺來身體汗 覺め來れば 身體汗す
 坐臥心骨悲 坐臥 心骨悲しむ

元續の夢についての考察(高橋)

閃閃燈背壁 閃閃 燈 壁を背にし
 膠膠鷄去峙 膠膠 鷄 峙を去る
 倦童顛倒寢 倦童 顛倒して寢
 我淚縱橫垂 我が涙 縱横に垂る
 淚垂啼不止 淚垂れて啼くこと止まず
 不止啼且聲 止まず 啼き且つ聲す
 啼聲覺僮僕 啼聲 僮僕を覺まし
 僮僕擦亂驚 僮僕 擦亂として驚く
 問我何所苦 我に何の苦しむ所ぞと問い
 問我何所思 我に何の思う所ぞと問う
 我亦不能語 我亦た 語るあたわず
 慘慘即路岐 慘慘として 路岐に即く
 前經新政縣 前すみて新政縣を經
 今夕復明辰 今夕 復た明辰
 寘寘滿心氣 寘寘たる滿心の氣
 不得說向人 人に説くことを得ず
 奇哉趙明府 奇なるかな 趙明府
 怪我眉不伸 我の眉の伸びざるを怪しむ

云有北來僧 云う「北來の僧有り

住此月與旬 此に住むこと 月と旬

自言辨貴骨 自ら言う 貴骨を辨ずと

謂若識天眞 謂うに天眞を識るが若し

談遊費悶景 談遊 悶景を費やし

何不與逡巡 何ぞ與に逡巡せざらんや」と

僧來爲予語 僧來りて予が爲に語り

語及昔所知 語昔の知る所に及ぶ

自言有奇中 自ら言う 「奇中有り

裴相未相時 裴相 未だ相ならざる時

讀書靈山寺 靈山寺に讀書し

住處接園籬 住む處 園籬を接す

指言他日貴 他日の貴を指言すれば

晷刻似不移 晷刻 移らざるに似たり」と

我聞僧此語 我 僧の此の語を聞き

不覺淚歔歔 覺えず 淚 歔歔たり

因言前夕夢 因りて言う 「前夕の夢

無人一相謂 人に一たび相い謂う無し

無乃裴相君 乃ち 裴相君

念我胸中氣 我が胸中の氣を念い

遣師及此言 師をして此の言に及ばしめ

使我盡前事 我をして前事を盡さしむ無からんや」と

僧云彼何親 僧云う 「彼れ何の親ぞや」と

言下涕不已 言下 涕已まず

我云知我深 我云う 「我を知ることに深く

不幸先我死 不幸にして我に先んじて死す」と

僧云裴相君 僧云う 「裴相君

如君思有幾 君の如き思うひと幾ばくか有る」と

我云滔滔衆 我云う 「滔滔の衆

好直者皆是 直を好む者皆な是れなり

唯我與白生 唯だ 我と白生と

感遇同所以 感遇 所以を同じうす

官學不同時 官學 時を同じうせず

生小異鄉里 生小にして 郷里を異にす

拔我塵土中 我を塵土中より抜き

使我名字美 我が名字をして美ならしむ

美名何足多 美名 何ぞ多とするに足らんや

深分從此始 深分 此より始まる

吹嘘莫我先 吹嘘 我に先んずるもの莫し

頑陋不我鄙 頑陋 我を鄙しまず

往往裴相門 往往 裴相の門

終年不曾履 終年 曾て履ま_ふず

相門多衆流 相門 衆流多く

多譽亦多毀 譽れ多く亦た毀り多し

如聞風過塵 風の塵を過ぐるを聞くが如く

不動井中水 動ぜず 井中の水

前時予掾荆 前時 予 荆に掾たり

公在期復起 公在りて復た起つを期す

自從裴公無 裴公無きより

吾道甘已矣 吾が道 甘んじて已めり

白生道亦孤 白生 道亦た孤

讒謗銷骨髓 讒謗 骨髓を銷かす

司馬九江城 九江城に司馬たり

無人一言理 人の一たび理を言う無し

元稹の夢についての考察(高橋)

爲師陳苦言 師が爲めに苦言を陳べ

揮涕滿十指 涕を揮い 十指に滿つ

未死終報恩 未だ死なずんば終に恩に報いん

師聽此男子 師聽け 此の男子」と

全體の構成をみると、夢と覺醒とを區別し、經驗的に再構成している。この詩には登場人物が多い。彼らは夢から覺めた後の役割を適所で果たしている。徐々に、元稹の感情を理解できるであろう人物が登場してくるのである。從僕は、主人の異常に驚き、頻りに理由を問うが、主人は話せない。悶悶としていると、趙明府は奇特な人物であり、北から來た僧を紹介してくれる。その僧は偶然にも裴垪を知っており、夢を語るに十分であった。裴垪が、元稹の許に使わしたのではないかと思う程である。夢はもちろん、夢を語るまでの構成、僧の登場に至っては、意圖的であり、小説的構成を持っているといえる。また、全體を通じて、會話が中心となっている。我云、答云、重云、問などの言ひ方で、括弧でくくれ、間接法で言いかえられていない。後半では、僧が述懐を求める問いを發し、その答として述

懐するという進行形式がとられている。これは、物事に即して、事實を推し出そうとする態度である。このことは、時間の推移とともに、事象について詳細に唱われている點にも表われている。それゆえ、登場人物が生彩を放ち、實感としてとらえられる。

この詩の主眼は、夢によって喚起された感情である。當時、元稹は通州司馬に貶流され、秋には病に罹っていた。

この詩は、その養生に、興元府へ行く途中の制作である。また、白居易にも「夢裴相公」(『白氏長慶集』卷十)があるが、白居易にとつても元稹にとつても裴埴は良き理解者であり、援護者でもあった。その裴埴が亡くなり、悲しみに浸るだけでなく、自分が中央へ復歸する糸口が絶えてしまったという感がある。將來に對しての不安と裴埴の死に對する哀惜が、胸中に満ちている。これらの感情が、夢を契機として語られるのである。夢は、エピソード的な構成で、裴埴と元稹の關係、裴埴の人柄を具體的に説明している。事態の詳しい敘述は事實ありのままの記録ではないが、そこには、元稹の構想力が働き、一つの眞實として語られている。

この三首のように、故人を悼む詩に夢を持ち込むと、夢にみたというだけで、故人を思い悲しんでいる自分が前面に押し出される。そして、夢を細かく描寫することにより、一つの世界を構築し再現することができる。夢という再現された世界で、故人に對する意識が明確にされ、同時に、現實を深くみつめることができるのである。このような構成で語られる夢は非條理な印象を與えない。元稹の夢は、現實から飛躍しきってしまうものではない。現實と同じ仕組みで構成され、枠組みを持つている。夢を非現實の世界を對象にしているという意識よりも、短い詩と同様、日常の一部であると考え、夢との比較により、現實を考へるのである。

IV

元稹は、全般に、長篇の詩が多いことが一つの特徴であるが、先の三首も長篇であり、また散文的であった。ここで、沈既濟の『枕中記』と李公佐の『南柯太守傳』をとり上げて、元稹の夢と比較してみたい。

元稹の活躍した中唐は、散文小説―傳奇―の隆盛であった時期である。元稹自身、『鶯鶯傳』の作者である。その唐の傳奇には、夢を扱うものが多い。しかし、唐になって急増したのではなく、唐以前にも、超自然なものとして、夢を素材にするものが多い。その多くは、古代から持たれていた夢に對しての神秘的色彩を帯びている。つまり、夢でみたことが實際に現れたり、夢で未來を豫測したり、夢占いのおもしろみなどの記事である。そういう夢の話素材にして、唐の傳奇が成立している。

『枕中記』は、建中二年以後遠くない頃に書かれたもので、夢に一代の榮枯盛衰を見、現世の榮華を虚しいものでと悟る物語である。時代は少し下って貞元十八年に成立した『南柯太守傳』も『枕中記』に似た構想である。『枕中記』の主人公、盧生の夢は、官人であるならば誰もが望む人生である。聰明な君主に認められ、信任を得、エリートコースを進み、一族の繁榮を見守りながら死ぬ。作者はこのような描きながら、自分の願望を適えて、憂いを晴らしている面がある。ところが、『南柯太守傳』の主人公、淳

元稹の夢についての考察(高橋)

于棼の場合は、全く突然に蟻の國へ招かれ、若い頃から「放蕩にして政事を習わず」であるにも関わらず、チャンスを得て、また周圍の援助によって治績を上げる。淳于棼自身は「性剛にして酒を好む」と政治的に無能である點が強調されている。このような人生を描くことにより、憂いを忘れるということよりも、無能でありながら權力を得ている者に對しての批判を意圖している。また『南柯太守傳』の夢は、より複雑である。淳于棼の父のこと、槐安國と蟻の世界、周辨・田子華の消息、槐安國への歸國の年と棼の死と、夢と現實の一致により、面白味を出し、夢の神秘的な力により、話にふくらみを持たせている。

このような相違はあるが、兩者の夢の扱い方は、共通點が多く、それは元稹との共通點となるものである。

まず、兩者とも、夢遊の話であり、夢を睡眠中自由に行動するものととらえて、一つの世界を築いている。『南柯太守傳』には、

二使者生を引きて車を下り、其の門に入り、階より升り、己の身を堂の東廡の下に臥せしむ。生甚だ驚畏し、

敢て前近せず。

とあり、魂が肉體から離れていることが示されている。夢が別世界へ到る方法として意識されている。

そして兩者とも、覺醒と夢に一線がひかれており、話の中に、はつきりと夢の世界を作っている。そこでは、主人公は彼の實際の生活とは離れた人生を體驗する。現實に得ることのできないものを夢にみたという別世界であるが、奇想天外なものではない。夢自體には、枠組みがあり、主人公の現在の狀況とはかけ離れているが、現實の社會の何處かで誰かが送ると考えられる人生である。⁴⁴そして、神秘的な重みはないが、夢だとして等閑にしておける内容ではなく、まさに現實の典型とも言える世界がため、夢に説得力があり、人生や社會に目を向けざるを得なくなつて何らかの悟りの境地に達するようになるのである。

先に述べたように、元稹は傳奇の作者である。李公佐は白行簡と交際があり、その白行簡と元稹の間には詩の交換があり、⁴⁵元稹は傳奇を享受した集團に屬したといえる。成立年代から見ても『枕中記』『南柯太守傳』に目を通した

可能性も大きい。それだけでなく、『枕中記』に類似した話や、夢遊を扱った話など、傳奇では盛んに夢が題材になっている。このことよつて、抵抗が少なく、それ以前では詩の中で扱われることが少なかった夢を導入できたと考えても不思議はない。元來、夢というものは奇妙であるはずなのに、元稹の夢は、理路整然たるものであり、「夢井」の落瓶は、意圖的な使用である。これは、傳奇と同様に、夢を一つの敘事のための手段として利用するのであり、小説的構成を持つ詩に、一つの表現方法として用いたと考えられる。しかし、傳奇の夢は、悟りを導くものとか、社會諷刺のためとか、充たされない現實の欲求を充たすためという目的があつて構築された虚構である。すなわち、傳奇で夢が描かれるのは、夢が、時間・空間の制約を超えて、虚構の世界を作るのに適當であつたためである。それに對して、元稹は、現實に基づいた夢を中心に置き、そこから作品を構成して、夢に對しての感慨を述べているが、現實から逃避して憂いを忘れ自らを慰めるという意圖はなく、悲觀的な夢をみて、深く自省する方向にある。

この相違は、元稹の詩に對する態度に關係があるのではないか。また、長篇の詩がみな故人を悼む主旨で作られてゐることに關係があるのではないか。他の悼亡詩をとりあげて考えてみたい。元稹は、現實的で生活に密着した面を持つ詩人である。非現實の世界を唱うことを好まない。潘岳以來の傳統として特に悼亡詩では、その傾向は強く、日常の些事にも心を寄せ、時には冗長すぎるといえるぐらい事細かに描寫する。例えば、

衣裳已施行看盡 衣裳已に施して行くゆく盡くるを看
針線猶存未忍開 針線猶お存するも未だ開くに忍びず

(三遺悲懷) 其二

獨有縑紗幘 獨だ 縑紗の幘有つて
憑人遠携得 人に憑りて遠く携え得たり

(張舊蚊幘)

と、妻の衣裳、針箱、かやといった日常の生活の一部に注目して、それを唱う。また、

朝従空屋裏 朝に空屋の裏より
騎馬入空臺 馬に騎りて空臺に入る

元稹の夢についての考察(高橋)

盡日推閑事 盡日 閑事を推す

還歸空屋來 還た空屋に歸り來たる

月明穿暗隙 月明るくして暗隙を穿ち

燈燼落殘灰 燈燼きて殘灰を落とす

更想咸陽道 更に想う 咸陽の道

魂車昨夜回 魂車 昨夜回りしを

(空屋題)

のように、狀況を描寫して、ある一つの場面を設定し、その中で感情を浮きだたせる。夢の場合も同じである。夢は故意に作り上げられた世界ではなく、また現實との對面を避けて夢の世界に埋没する性格のものでもない。夢は鮮やかに狀況を再現するための格好の場であり、夢の細部に及ぶ説明的な描寫もそのためのものである。

V

次に、元稹の作品の中でもとりわけ傳奇的である「夢遊春七十韻」の夢について考えてみる。この詩には序は残っていないが、白居易の「和夢遊春一百韻」の序に、

微之江陵に到り、又夢遊春七十韻を以て予に寄す。且つ其の序に題して曰く、斯の言たる吾を知らざる者をして知ら使むべからず。吾を知る者には亦た知らざら使むべからず。樂天は吾を知るなり。吾敢て吾子をして知ら使めずんばあらず。

とある。人には見せてはならないものである。しかし、私を知ってくれるあなたには見てもらわすにはいられない。

そして、自分の青春を自由に歌い上げようとしている。

昔歳夢遊春 昔歳 夢に春に遊ぶ

夢遊何所遇 夢に遊び 何の遇う所ぞ

夢入深洞中 夢に深き洞中に入り

遂果平生趣 遂に平生の趣を果たす

清冷浅漫流 清冷として浅漫流れ

畫舫蘭篙渡 畫舫 蘭篙渡る

過盡萬株桃 萬株の桃を過ぎ盡くし

盤旋竹林路 竹林の路を盤旋す

長廊抱小樓 長廊は小樓を抱き

門牖相廻互 門牖は相い廻互す

樓下雜花叢 樓下 花叢まじり

叢邊透鷓鴣 叢邊 鷓鴣 遶る

池光漾霞影 池光 霞影を漾ただよわせ

曉日初明煦 曉日は初めて明煦たり

未敢上階行 未だ敢て階を上って行かず

頻移曲池步 頻りに曲池の歩を移す

烏龍不作聲 烏龍 聲を作さず

碧玉曾相慕 碧玉 曾て相い慕う

漸到簾幕間 漸く簾幕の間に到るも

徘徊意猶懼 徘徊して意猶お懼おそる

閑窺東西閣 閑かに東西の閣を窺うかがえば

奇玩參差布 奇玩 參差として布く

隔子碧油糊 隔子 碧油の糊

鵝鉤紫金鍍 鵝鉤 紫金の鍍

逡巡日漸高 逡巡として日漸く高く

影響人將寤 影響 人將に寤めんとす

鸚鵡飢亂鳴 鸚鵡 飢えて亂鳴し

嬌娃睡猶怒 嬌娃 睡りて猶お怒る

簾開侍兒起 簾開き 侍兒起き

見我遙相諭 我を見て遙かに相い諭す

鋪設繡紅茵 繡紅の茵を鋪設し

施張鈿裝具 鈿裝の具を施張す

潛塞翡翠帳 潛かに翡翠の帳を塞げ

瞥見珊瑚樹 珊瑚の樹を瞥見す

不辨花貌人 辨せず 花貌の人

空驚香若霧 空しく驚く 香 霧の若きを

身迴夜合偏 身迴らすは 夜合の偏よるがごとく

態斂晨霞聚 態斂むるは 晨霞の聚まるがごとし

睡臉桃破風 睡臉 桃の風に破れたる

汗漉蓮委露 汗漉 蓮の露を委きたる

叢梳百葉髻 叢梳 百葉の髻

金臙重臺屨 金臙 重臺の屨

紕軟鈿頭裙 紕軟たる 鈿頭の裙

玲瓏合歡袴 玲瓏たる 合歡の袴

鮮妍脂粉薄 鮮妍 脂粉薄き

暗澹衣裳故 暗澹 衣裳の故き

最似紅牡丹 最も似たり 紅の牡丹

雨來春欲暮 雨來りて 春暮れんと欲す

夢魂良易驚 夢魂 良に驚め易く

靈境難久寓 靈境 久しく寓するに難し

……

ここで歌われている一人の仙女との夢の出会い、美し

い仙女と快樂の時を過ごすという遊仙の形式を借りて仙境

という非現實の世界へ足を踏み入れると同時に、それが夢

の中での出来事であるという二重の虚構である。そして、

夢での逢瀬は、今まで述べてきた元稹の夢の世界と異なり、

『鶯鶯傳』の中でも言及される甘美な「傳奇」の世界であ

る。

『鶯鶯傳』は、「夢遊春」と同様、元稹の戀愛體驗を述

べたものとされる。『鶯鶯傳』では、主人公の張生の戀愛

對象は、彼の遠縁の良家の娘である。『鶯鶯傳』をほとん

ど元稹の自傳であるとして、實際に元稹の戀愛對象をいと

こととする説もあるが、陳寅恪氏の「讀鶯鶯傳」は、唐代で

は「仙」とは多く「妖艶な婦人」または「風流放誕の女道

士」の代名詞であり、さらには「娼妓」を指すこともあったという。そして元稹は實際には、遊里の妓女と戀愛關係を持ったとしている。序でも述べているように、彼を知る者には、戀愛の對象が誰であるかが理解できたであろうが、今それを明らかにすることは難しい。一方、「淫靡を元稹に學ぶ」⁽²⁰⁾「元和より已來、元白なる者有り、纖艶にして不逞なり」と、艷詩に決して好意的でない傾向もあった。女性を唱ったり、戀愛を唱うことがなかったわけではないが、士大夫が自己の體驗を唱うことはかなり抵抗があったと推察される。序でわざわざ自分を知る者にだけわかかってほしいと斷わるのも、自己の戀愛體驗を描くことに對しての批判を避ける配慮であろう。だから、『鶯鶯傳』という傳奇の形式で、張生に自己を托して語っているように、元稹は、この詩でも若き日の戀愛について直言することを避けて、夢であると唱っているのではないか。すなわち、夢という別世界を描く事により、元稹自身との直接的な關係を斷ち切っているのである。

夢として語る場合、その世界はより甘美なものとなる。

『鶯鶯傳』には次のような箇所がある。

張生は飄飄然として、且く神仙の徒かと疑い、人間より至ると謂わず。有頃して、寺の鐘鳴り、天將に曉けんとす。……張生辨色にして興き、自ら疑いて曰く、豈に其れ夢ならんか。

神仙の女ではないか、人の世から來た人と思えないといい、快樂の一夜を夢ではなかったかと疑っている。美しい女性との出會いをこのように表現するように、經驗を美しく唱うという意圖により、「夢遊春」では、仙境に赴き、仙女との交遊を夢に見たと表現したと考えられる。言い換えると、このような夢の別世界は、現實に得た體驗を美化し誇張した世界である。思ひ出は美しく語られれば語られる程、本人から離脱し、独自の生命を持ち、歩きはじめる。まして、夢を打ち明けるといふことは、語り手の個人的經驗であることをやめることである。「感夢」において、夢を語るに足る人物が現われるまで夢を語らなかつた元稹は、「夢遊春」でも自らを知ってくれる者に見せたいと序で述べている。このことは、夢の打ち明け話に元稹自身が、重

い意味を感じていたと考えられる。個人的なものから移行して、一つの集合的なものとなることを多分に意識していたのではないか。(語り手を中心とした聞き手の集合が存在する時、夢は個人の體驗から離れていく。夢の打ち明けに、修正や粉飾が加わっても、夢の記述には常に讀者をとりこんでいく力があり、それを元稹が意識していたのではないか。)

夢は所詮消失する。現世からは一應隔絶された場である夢は、すべて現實へ歸ることが定められている。この認識は、夢と現實との對比として表現され、前述の詩にも強く意識されていた。すなわち、常に、元稹の失なわれたものに對する哀惜の念が夢を引き起こし、その夢は「覺」を意識しての場なのである。「夢遊春」では、章叢との結婚が「覺」として唱われていく。そして、今まで述べてきた詩と同じように、「一夢何ぞ云うに足らん」と唱い、傳奇的な夢の世界は、現實と一線を畫して存在しており、元稹の意識の中心は「覺」にある。つまり、過去の戀愛體驗を夢の世界において再現し、その世界と現實の基となる結婚の

對比により、作品を構成するのである。そして、夢にこだわり続ける。「覺と夢異なると云うと雖も 同に是れ終に駐まり難し」といい、夢だからといって軽く考えているわけではない。「夢」も「覺」も元稹に重くのしかかっているのである。

VI

中唐では、夢は自由な空想の世界を創造するのに最適な手段として、傳奇に多く出現してくる。それは、夢は一つの現象としてみなされ、神祕的なものとしてはそれ程重要視されなかったことより生まれたものだろう。夢の神祕性は、夢が人に與える原初的な性質であり、當然後世にも多少は受け繼がれてきたが、公的レベルから私的レベルへ移行するにつれて、夢の精神的要素で解釋されるにつれて、全面的に神託や豫兆として夢を信賴する態度は薄くなっていく。しかし、一方、個々の夢の内容の分析により、夢の自由な遊行に焦點が置かれると、夢の表現は動的になり、更には、夢に對して日常生活で實現不可能と思われること

を代償する能力を認め、やがて、夢に願いを託したり、夢で別世界を構成したり、理想や希望を表わすという様々な方向へ夢が広がっていく。いわば、神祕的な色彩から脱してはじめて、夢は文學的言語として存在し、現在我々が夢に抱くイメージ、多義性などに近づき、詩の中で生かされるようになるといえる。

元稹の詩は、夢の語の使用頻度が高い。また、豫兆として夢を考へることもない。日常生活の中で唱われる元稹の詩において夢が使用される場合、夢は日々の生活の一部であり、日々の生活の細部を再現する。夢の使用は、また傳奇に多分に影響され、小説的な詩の構成に寄與している。夢の一語に凝結されたイメージを見出すことはできない。夢に多彩なイメージや深みを與えるのは、後出の詩人に待たねばならないが、散文に興味を持たれ夢を題材とすることの多い傳奇が盛んであった中唐に、元稹が、夢をこのように使用して、詩に夢を持ち込むことに先鞭をつけたと言えるだろう。

注

- (1) この詩は『元氏長慶集』卷一七に「使東川」其四「梁州夢」と題し、ここでは、
夢君同邊曲江頭、也向慈恩院遊、亭吏呼人排去馬、忽驚身在古梁州。
- (2) 『三夢記』のこの話は、孟榮の『本事詩』徵異第五にも類似のものがあり、ここでは、元稹の詩は、
夢君兄弟曲江頭、也向慈恩院裏遊、驛吏喚人排馬去、忽驚身在古梁州。
に作られている。
- (3) 元稹の詩八二七首中、夢の語を含むものは七五首ある。杜甫は一四五首中一八首、李白は一〇〇四首中七七首、韓愈は四〇二首中一七首である。明の張之象等編の『唐詩類苑』卷八七人部夢には、六九首の夢に關する詩があるが、元稹は一二首收められており、白居易の一九首に次いで多い。
- (4) 福永光司『莊子』内篇（中國古典選12）66ページ参照。
- (5) 『太平御覽』三九七には、
夢は像なり。精氣の動ずるなり。魂魄身を離れて神の來往するなり。〔夢書〕
とあり、同様に考えられていたとわかる。
- (6) 『韓昌黎集』卷二四の「監察御史元君妻京兆韋氏夫人墓誌銘」には、「夫人諱叢、字茂之、姓韋氏」とある。『朱子考

異」は、「茂方作成、今以名義推之、當作茂。」とし、字は茂
之が正しい。

(6) 鄭玄注、覺時所思念之而夢。

(7) 燕姑貽天夢 燕姑 天夢を貽られ

梁王盡孝思 梁王 孝思を盡くす

〔恭王故太妃挽歌詞〕其一〕

頭白夫妻分無子 頭白く 夫妻 分として子無く

誰令蘭夢感衰翁 誰か蘭夢をして衰翁を感ぜしめん

〔感逝〕

宣公三年の記事を典故とし、また蘭夢が子をはらむことを示
しているのであって、豫兆とは考えてはいない。しかし、次
のような詩がある。

尙想舊情憐婢僕 尙お想う 舊情 婢僕を憐れむを

也曾因夢送錢財 也曾て 夢に因り 錢財を送るを

〔三遣悲懷〕其二〕

夢によって錢財を送ることが一體どういふことかわからない
が、縁起かつぎか何かのようである。これも古代の神祕主義
からの影響であろうか。しかし、こういう夢の扱い方をして
いるものは少ない。

(8) 山本和義「元稹の艶詩及び悼亡詩について」〔中國文學報〕

第九冊) 82 ページ参照。

(9) 入谷仙介「悼亡詩について―潘岳から元稹まで―」〔入矢
教授・小川教授退休記念中國文學語學論集〕

元稹の夢についての考察(高橋)

(10) 自注に「夢故兵部裴尙書相公」とある。

(11) 五年生死隔、一夕魂夢通。夢中如往日、同直金鑾宮。髣髴
金紫色、分明冰玉容。勤勤相眷意、亦與平生同。既寤知是夢、
惘然情未終。追想當時事、何殊昨夜中。自我學心法、萬緣成
一空。今朝爲君子、流涕一霑胸。

(12) 内田道夫「唐代小説における夢と幻設」〔集刊東洋學〕I

清水榮吉「中國の説話と小説における夢」〔天理大學學報〕

第二十輯) 参照。

(13) 内山知也『隋唐小説研究』第四章中唐小説論第二節参照。

(14) 内山知也前掲書参照。

(15) 『元氏長慶集』卷二〇「酬知退」、また、李公佐と白行簡
は『李娃傳』中に登場する。

(16) 内田・清水、前掲書参照。

(17) 『白氏長慶集』卷十四。

(18) 『才調集』卷五。

(19) 趙令時「侯鯖錄」卷五「辨傳奇驚驚事」参照。

(20) 李肇『唐國史補』卷下。

(21) 杜牧『樊川文集』卷九「唐故平盧軍節度巡官隴西李府君墓
誌銘」の李戡の語。

本文に引用した元稹の詩は、文學古籍刊行社の影楊循吉鈔
本の『元氏長慶集』による。また、年譜、制作年代等多く、
花房英樹編『元稹研究』を参照した。